

「子規と鯛鮓(押し寿司)と俳句」

身内の老若男女うちつどひて

○鯛鮓すし いちもんさんじゅうごくにんや一門いちもんさんじゅうごくにん三十五六人

子規

明治二十五年夏の句。鯛鮓は瀬戸内で捕れる鯛を軽く酢で締め、薄く切り押しした寿司とされます。一族三十五六人が鯛の押し寿司をはじめご馳走の前に卓上に集まっている賑やかな様子がうかがえます。かつて松山では、祭りとか何かにつけて親戚中が集まり、必ずご馳走の中心にばら寿司や押し寿司が盛られていました。

満面に笑みをたたえ、美味しそうに故郷の好物の寿司や料理を食べている子規が目に見えます。幸せなひと時であったのでしよう。

當地ニ於テ喜はしきものハ

海魚の鮮なる事にて候

いっしょうさんたん
一嘗三嘆

子規が愛した瀬戸の鯛料理



『鯛鮓すし(押し寿司)』